

---

# バカと最強の男の娘と召喚獣

クリオネ(沙\*・ ・)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと最強の男の娘と召喚獣

### 【Nコード】

N5869X

### 【作者名】

クリオネ（沙＊．．）

### 【あらすじ】

あのバカテスに最強の男の娘を加えた感じです。ストーリーは原作＋オリジナルで頑張ります。カップリングは明久×姫路、雄二×霧島、康太×愛子、オリ×秀吉×優子で行きます。作者には文才が全くありません。それでもいいって人は是非見てください！よろしくお願いします！

## オリキャラ設定（前書き）

作者のクリオネです（^ー^）（^ー^）/  
このストーリーはいいかも！と思って書きました。  
バカと戦争と召喚獣の方もよろしくお願いします

## オリキャラ設定

カザミネ  
風峰 光

性別 男（秀吉）

容姿 髪は水色で腰まで伸ばしている。髪型はFFのクラウド瞳は琥珀色。

顔は秀吉と同じかそれ以上ぐらい可愛い。

身長は143cmで体重は37kg。音楽が好きなためいつもイヤホンを左耳に付けている。

性格 女と言われると怒る（それ以外は冷静）。そして明久並みに鈍感。

趣味 音楽鑑賞、昼寝、悪巧み、ゲーム、漫画

特技 神峰流武術、暗器の使用、変装（完璧）、声帯模写（完璧）、情報収集、歌

肩書き 特別観察者（観察処分者とは違いフィードバックがなく物理干渉ができる）

一人称 俺

三人称 風峰、ライト

二つ名 『水色の暗殺者』

得意科目 保健体育以外（理数系、英語は特に得意）

苦手科目 保健体育（一桁）

総合科目 8000～9000点

家族 両親は海外の会社で仕事、兄は海外で勉強している。

友達 明久と康太と木下姉弟とは幼馴染。雄二+明久は悪友。  
姫路とも知り合い。

召喚獣 本人をそのままちっちゃくした感じ。

武器 ベレッタM92×2（ベレッタとは銃の名前です）

装備 タキシードにマント（黒）

腕輪 ライトニング  
光速

効果 3分間光の速さで移動できるが操作が難しくなる。

消費点数 30点

## オリキャラ設定（後書き）

どうでしたか？最初の方は投稿は早いと思います。  
のよろしく！

## 第一話（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用意するべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

「問題点・・・マグネシウムに炎をかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例・・・ジュラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目というひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点・・・ガス代を払っていなかったこと」

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

「合金の例・・・未来合金（すごく強い）」

教師のコメント

すごく強いと言われましても。

風峰光の答え

「問題点・・・まず、自分で鍋を作ったこと。  
合金の例・・・ジュラルミン」

教師のコメント

いやゝ例えですから。なのに合金の例が合ってる  
事に腹が立ちます。



## 第一話

俺たちがこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

別に花を愛でるほどの雅な人間ではないがその眺めには一瞬目を奪われる。

でも、それも一瞬のこと。

「吉井、風峰遅刻だぞ」

校門の前でドスがきいた声に呼び止められる。

「あ、鉄じーじゃなくて、西村先生おはようございます」

「おはようございます。先生」

「おはよう風峰、そして吉井今鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

明久お前本当に馬鹿だな。少しは頭使え。

「それにしても普通に『おはようございます』じゃないだろ

うが」

「あ、すみません。えーっとー今日も肌が黒いですね」

「遅れてきてすみません」

「風峰は良し、吉井お前は遅刻の謝罪よりも俺の肌の方が重要なのか？」

「そつちでしたかすみません」

そつち以外なにがあるんだよ！

「全くお前というヤツは．．．いくらバツを与えても全然懲りないな」

ため息混じりに先生がつぶやく。

「先生、僕そんなに遅刻はありませんよ？」

「遅刻は、な。ほら受け取れ」

先生が箱から封筒を取り出し、俺たちに差し出してくる。

「先生、俺はいらないんですが．．．」

「一応だ。受け取っておけ」

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

「俺はおまえを去年一年見てきて『もしかすると、吉井は馬鹿なんじ

やないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

おいっ！そこには疑いをもっちゃいけないえよ！

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解しているようじや、更に

『節穴』なんて渾名を付けられちゃいますよ？」

お前の頭は大丈夫か？

「ああ。振り分け試験の結果を見て先生の間違いに気がついたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

『吉井明久．．．Fクラス』

「お前は馬鹿だ」

こうして俺たちの最低クラス生活が幕を開けた。

「．．．なんだろう、このバカでかい教室は」

「見るな明久。見たら見るほどFクラスに行けなくなるぞ」

意味で

「そうだね。Aクラスがここまですごいんだ、Fクラス違う  
すごいクラスだろうね」

「分かったなら行くぞ」

俺たちは走り出さない程度に廊下を急いで進んでいった。

「あれ？二のFってどこかな？僕には見えないや」

「明久、現実逃避するな。ここがFクラスだ」

全く現実逃避するぐらいだったら勉強しろ。

「まず俺が入るからお前は後からはいれ」

「うっ、うん」

「すいません。遅れちゃいました」

「早く座れ、この蛆虫野・・・郎？」

入っていきなり罵倒とは地獄の片道切符をくれてやろうかな。

「ほう、俺を蛆虫扱いするとは覚悟はできてるんだな？雄二」

「まっ、待て！俺はお前に言ったんじゃない・・・」

「問答無用！！」

バキッ！ボコッ！ガスッ！

俺は視線をあびていることにきずいた。

「なつ、なんだ？」

「「「かつ、かつ、可愛い〜〜〜〜！！！！！！」」」

「なつ、何言いやがる！？俺は男だ！！」

モ「俺と付き合ってくれ〜〜〜〜！！」

モ「俺と結婚してくれ〜〜〜〜！！」

「くっ、来るな！！変態共！！」

俺は一斉に木製くないを投げた。

「「「グッハー〜〜〜〜！！！！」」」

「ねえライト、これはどうしたの？」

いつの間にか明久が入ってきていた。

「雄二は蛆虫扱いしたからボコッた。あいつらは俺を女と言いやがった

から潰した。」

「そつなんだ。あ、それと席どこでもいいらしいよ」

「そうなのか？なら一番後ろにするか」

「だね」

俺たちは席に着いた。フアアアア・昨日ゲームのしすぎで睡眠時間たら

ねえ。少し寝るか。

「明久、俺のことになった時は起こしてくれ」

「うん。分かったよ」

俺は眠りについた。

「ラ・・・起き・・・」

「うゝん・・・」

「ライト起きて」

「うん？明久おはよっ、で今何？」

「自己紹介だよ。次、ライトの番だよ」

「ああ、ありがとな」

おっと前のやつ終わったな。

「俺は風峰 光だ。言っとくが俺は男だ」

モ「何っ！秀吉並みの男の娘だと！」  
モ「スゲー！！」

「だっ、黙れ！！」

俺は再び木製くないを投げた。

「グハっ！！！！」

「はい、その人静かにしてください」

ガツシャーン！！

「変えを持ってきますので静かにしてください」

先生は机を取りに行った。どんだけボロいんだよ。

「雄二、ライトちよっと廊下に出てくれる」

「わかった」

教室を出た。どうかしたのだろうか？

「雄二、ライト二年になったんだし試召戦争しない？」

「どうした？戦争をしたいなんて」

「全く、お前は何を考えてるんだ？」

「いや、あの設備はさすがに無理があるかなって思ったか

ら  
「

「嘘だな。お前分かりやすい嘘を付くな」

「そうだ、それに姫路の為だろ？」

「なんで、分かったの？」

「お前、俺は何年お前の幼馴染やってきたと思ってる？」

「まあ、いいだろう。実は俺も仕掛けようと思ってたんだ」

雄二も？コイツの場合はあれを超えるためだろうな。

「雄二も？なんで？」

「世の中勉強だけが全てじゃないってことを証明したいんだ」

「なるほどな。うん、先生が帰ってきたから教室入るぞ」

「うん」

ここで一旦教室に入った。

「では坂本くん。君が最後です。」

「ああ、ではここの代表の坂本だ。坂本でも代表でも好きに読んでくれ」

さすがだな。手馴れえてるな。



「さて、お前らにひとつ聞きたい。Aクラスは冷蔵庫にリク  
ライニング

シートに個人エアコンらしいが……不満はないか？」

「『大有りじゃああー！！』」

「だろ？俺もこの設備には大いに不満だ。だから、俺たちFクラスは

「Aクラスに試験召喚戦争を仕掛ける」

俺たちFクラスが戦争という名の引き金を引いた。

## 第一話（後書き）

どうでしたか？おもしろかったならコメントください。  
よろしく願いします。

## 第二話（前書き）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（２）悪いことがあつた上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

「（１）弘法にも筆の誤り」

「（２）泣きつ面に蜂」

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』。、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

「（１）弘法の川流れ」

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

「泣きつ面蹴ったり」

風峰光の答え

「踏んだり蹴ったり」

教師のコメント

君たちは鬼ですか。

## 第二話

Aクラスへの宣戦布告。それはこのFクラスにとって現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

モ「勝てるわけがない」

モ「これ以上設備が落とされるのは嫌だ」

モ「姫路さんがいたらそれでいい」

モ「秀吉付き合ってくれ」

モ「風峰ちゃん結婚してください」

そんな悲鳴がいつぱい出てくる。最後のやつ絶対に潰す！

「そんなことはない。必ず勝てる。いや俺が勝たせてみせる」

なんか作戦があつての宣言だな。

モ「何を馬鹿なことを」

モ「できるわけないだろう」

モ「何を根拠があつてそんなことを」

まあ、たしかにな。根拠がないんじゃ賛成はできないな。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

うむ、あるっちゃあるがそれだけならダメだと思うが・・・

「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす悪友。

「おい、康太。畳みに顔をつけて姫路のスカートを覗きながらライトを撮って

ないで前に出てこい」

「……(ブンブン)」

「はっ、はわ!」

「康太、ムツツリなのに直接スカートを覗くと死ぬぞ?」

必死になって否定を続ける康太。いや、否定してもバレてるから。

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者だ」  
ムツツリーニ

「……(ブンブン)!!」

土屋康太ってゆう名前はそこまで有名じゃないがムツツリー  
ニの方はかなり有名だ。

モ「馬鹿な、奴がムツツリーニだというのが……」  
モ「だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうと  
しているぞ……」

モ「ああ。ムツツリに恥じない姿だ……」

自分の下心を隠し続ける。ある意味すごいな。

「????」

姫路は全くわかってないようだ。ムツッリー二っていったら誰でもわかると思う

が。。。

「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力  
はよく知っている  
はずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ、うちの主戦力だ。期待している」

たしかにな、姫路は学年次席ぐらいの点数だからな。

モ「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった」

モ「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

モ「ああ、彼女さえいれば何も要らないな」

モ「いや、俺は風峰ちゃんだな」

やっぱり、姫路の実力はほかの奴ら買ってるな。それと最後の  
やつ殺す！

「木下秀吉だっている」

秀、演技ならすごいが、点数はよくないはずだが・

モ「おお．．．．！」

モ「ああ。あいつは確か木下優子の．．．」

「当然俺も全力を尽くす」

モ「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

モ「坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？」

モ「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「それに、吉井明久だっている」

．．．．シン

士氣が一気に下がったな。明久の名前はオチ扱いか。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全く

そんな必要は

ないよね！」

モ「誰だよ、吉井明久つて」

モ「聞いたことないぞ」

「ホラ！折角上がりかけてた士氣に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは

違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを　　つて、な  
んで僕を睨むの？

士氣が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

ハッハッハ！すごく面白いじゃねえか！

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは  
観察処分者 だ」

モ「・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称  
で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

お茶目って・・・お前はバカすぎるな。

「あの、それってどういうものなんですか？」

「具体的には教師の雑用だな。力仕事とかそういった類の雑  
用を、特例として

物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

「そうなんですか？それってすごいですね。試験召喚獣って  
見た目と違って力  
持ちって聞きましたから、そんなことが出来るなんて便利で  
すよね」

姫路の目がキラキラしている。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」



明久、偉いぞ自慢せずに謙虚のフリをするなんて。

モ「おいおい。 観察処分者 ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人

も苦しいってことだろ？」

モ「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな」

まあ、自分にもダメージがあるんだ、それなら召喚したくないだろう。

「気にするな。どうせいてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこはボクをフォローする台詞を言うべきだよね？」

「そして最後に風峰光だ。おい、ライト出てこい」

「わかった」

俺は教団にたった。ほう、見晴らしがいいな。

「こいつの別名を知っているか？」

モ「知らねえな」

モ「俺も」

「なら教えてやろう。こいつはあの『水色の暗殺者』だ」

モ「な、水色の暗殺者って・・・」

モ「暴力団2000人近くいたやつを30分で倒したってゆうあの．．」

「そうだ、それにこいつには特別な肩書きがある」

モ「なんだと!」

モ「肩書きは観察処分者だけじゃないのか」

「ああ、こいつの肩書きは 特別処分者 だ」

モ「特別処分者?」

モ「なんだ?それは」

「俺が言おう。特別処分者は観察処分者同様、物理干渉ができる。しかし

特別処分者はフィードバックがない。だから、観察処分者とは違って普通

に召喚できる。その代わりで、テストやテストの丸付けなどをしないといけない」

モ「なら、テストの丸付けでずるをすれば．．」

「それは出来ない」

モ「なんでなんだ?」

「それは、鉄人が横にいるからだ」

「そうなんだ」

全員理解してくれたようだ。

「でも、前は鉄人と一緒に補修室で勉強教えてたけど・・・」

「それは、今回から暇なときは補修を手伝ってくれと頼まれたからだ」

モ「「「「「「「「「「おっ~~~~!!!!」」」」」

「モ、補修室に天使が！」

モ「やっ  
た~~~~  
!!!!」

なぜ、喜んでるんだ？

「それと、こいつの点数はAクラス主席確実の点数だ」

「おお～～～～！！！」

どれだけテンション高いんだ？

「では、俺たちの力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思っ」

力の証明か。面白そうだな！

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

全毛「当然だ！！！！！」

「ならば全員、筆を執れ！出陣の準備だ！」

全モ「おおーっ！！」

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

全モ「うおおーっ！！」

「おっ、おー．．．」

姫路も周りに圧されたのか、掛け声を出している。

「では、明久にはDクラスの死者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「．．．下位勢力の使者って大抵ひどい目に合うよね？しかも、今字が違  
ってなかった？」

「気のせいだろ？明久大丈夫だ。お前なら逝ける！」

「今も字があ違うくなかった？」

ちっ！勘がいい奴だ！

「大丈夫だ。奴らはお前に危害は加えることはない。騙され  
たとおもって  
行ってみろ」

「本当に？」

「当たり前だ。大事な使者に手荒なマネはすることはない」

「大丈夫、俺たちを信じる。俺たちは人を騙すようなことはしない」

「分かったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「バカだ！ここに世界一のバカがいる！！」

「ああ、頼んだぞ」

明久は機嫌がよさそうにDクラスに向かった。

「くくつ、精精生き延びるよ。明久<sup>ニヤッ</sup>」

「全くだな（ニヤツ）」

俺たちは明久がどんな姿で帰ってくるのか楽しみに待っていた。おっと、

その前に俺を女扱いしたやつを地獄行きにしないとな。俺は女扱いした

ヤツを殺しに行った。ふふふ、明久が帰ってくる前に殺そーつと。

## 第二話（後書き）

クリオネです。明久って本当に馬鹿だなんて思う

光「全く、あんな嘘に引つかかるなんてバカ以外何もいえねえ」

ほんとですな

光「明久がどんな姿で帰って来るか、楽しみだ」

そだね、ではまた次回会いましょう。

光「次も見てくださいな！」

### 第三話（前書き）

問 以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that  
my grandmother had  
used regularly.』

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。ちゃんと勉強してますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「  
x」

教師のコメント

できれば地球上の言葉で。

風峰光の答え

「これは私の本棚が愛用していた祖母です。」

教師のコメント

本棚と祖母が逆です。



### 第三話

「騙されたっ!!」

「やはりそうきたか」

雄二と言葉が重なる。

「やはりってなんだよ! やっぱり使用者への暴行は予想道理だったんじゃないか!」

「当然だ。そんなことも予想できないようで代表が務まるか」

「少しは悪びれろよ!」

何を怒ってるんだ?

「吉井君、大丈夫ですか?」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫?」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「

慌てて腕を抑えて転げまわる明久。<sup>バカ</sup>

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行っぞ」

雄二は扉を開けて外に出ていった。

「あの、痛かったら言ってくださいね？」

「大変じゃったの」

「日常茶飯事だから別に大丈夫じゃね？」

「ちよつとは心配してよ！」

明久を少しからかった。

「……………（サスサス）」

「ムツツリーニ。覗いてた時の畳の後ならもう消えてるよ？」

「……………！！（ブンブン）」

「康太、お前がエロイのはこの皆知ってるぞ？」

「……………！！（ブンブンブン）」

「ここまでバレておるのに否定し続けるとは、ある意味凄いのじゃ」

「……………!!」(ブンブンブン)」

「何色だった？」

「みずいろ」

そこだけ即答かよ！

「やはりムツツリーニはいろんな意味ですごいのう」

「「だな(ね)」」

「……………!!」(ブンブン)」

こんな会話をしながらゆっくり教室で話をしていると。

「ほら吉井。あんたも来るの」

ぐいつと明久を引っ張る島田。

「あー、はいはい」

「返事は一回！

「へーい」

「…………一度、Das Brechen  
語だと…………」  
ええと、日本

「・・・調教」

「そう。調教の必要がいりそうね」

「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

「じゃ、中間をとってZuchthausung」

「折檻、だな」

「それ、悪化してるよね」

「そう？」

なぜ、簡単な漢字が分からずに調教とか折檻なんて漢字知ってるんだ？

「ムツツリーニ。よく調教なぞというドイツ語を知っておるのっ」

「・・・一般教養」

「相変わらず性に関しての知識はずば抜けてるな康太」

「・・・（ブンブン）」

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の裕二が屋上に通じる扉を開けて太陽のしたに出た。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「まあ、してなかったらもう一回逝かせるけど」

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ。」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「仕方ない、ほれこの弁当やるよ」

「ありがとう！でもいいの？食べる物なくなっちゃうよ」

「大丈夫だ。こういう時のためにソルトウォーターで生きていけるようにしている」

「そうなんだ」

「あの、吉井君ってお昼食べないんですか？」

「いや、一応食べてるよ」

「おいおい、あれを食ってるって言うんなら病院行ってこい！」

「・・・あれは食べていると言えるのか？」

「あれを食べているって言えるんなら脳外科行ってこい」

「何が言いたいのか」

「いや、お前の主食って 水と塩だろう？」

雄二とはよく声が重なる。雄二とは気が合いそうだ。

「失礼な。きちんと砂糖も食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃな」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「明久、俺はお前の半分の仕送りで暮らしているんだぞ？」

「じゃあ、なんであんなに無駄ずかいしても無くならないのさ！」

「俺はお前と違ってバイトをしているんだ。だから大丈夫なんだ」

「うっ……」

「あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？」

「おいおい、字が違う」

「本当にいいの？」

「はい。明日のお昼でよければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

明久が雄二のからかう台詞を心地よく聞いている。

「・・・ふーん。瑞希って随分優しいのね。吉井、だけに作ってくるなんて」

ずいぶん棘のある言葉だな。もしかして島田って明久のこと好きなのか？

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・」

「俺たちにも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう」

「・・・(コクコク)」

「・・・お手並み拝見ね」

「七人分作るのはきついからデザートは俺がつくるから」

「え、でも・・・」

「いいんだよ」

「わかりました。それじゃ、皆に作ってきますね」

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな・・・」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き

」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「にしたいと思ってました」

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「だって・・・お弁当が・・・」



お前が貧乏なのが悪いんだぞ。

「さて、話かなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

そういえば、もとは試召戦争の話だったな。

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？」

階段を踏んでいくならEクラスじゃろうし勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。だがライトはわかってるんじゃないのか？」

「ああ、大体はわかった」

「本当!？」

「ああ、まずEクラスを攻めない理由、これは戦うまでもない相手だからだ」

「え？でも、僕らよりもクラスが上だよ？」

「振り分け試験の時はそうだったかもしれない。けど、実際は違う。」

オマエの周りの面子をよく見てみる」

「えーっと・・・」

「美少女二人と馬鹿が二人とムツツリが一人と美少女が一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!?!雄二が美少女に反応するの!?!」

「・・・(ポっ)」

「ムツツリーニまで!?!どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない!」

「おい落ち着け。二人とも」

「そうじゃぞ。代表にムツツリーニ」

「秀吉(美少女)、ライト(美少女)ありがとう」

「おい!今、美少女って言ったろ!」

「わしは男じゃ!」

「おい!俺も男だ!」

「と、それよりもライトの言ってることは100点満点だ」

「やっぱりな」

「で、ここからは俺が説明する。姫路やライトに問題無い今、

Eクラスと戦って

も意味がないってことだ」

「？それならDクラスとは正面からぶつかるど厳しいの？」

「いや、ライトもいるから確実に勝てるが、Dクラス戦ではライトは出さない」

「隠しておくてことか」

「そうだ、ライトを出さなかったら確実に勝てるとはいえないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

俺の予想だとDクラスを倒し次にBクラスだな。

「あ、あの！」

「ん？どうした姫路」

「えっと、その言いかけた、って……吉井君と坂本くんは前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為につて明久に

相談

「

「それはそうと！」

明久お前はほんとに勇気がないな。

「さっきの話Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

「お前らが協力してくれるなら勝てる」

協力してくれたらって俺は代表に付いていくだけだけどな。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは      最強だ」

ふふっ、面白い。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「・・・(グッ)」

「が、頑張りますっ」

「俺は雄二について行くぜ」

打倒Aクラス。荒唐無稽な夢かもしれない。実現不可能な絵  
空事かもしれない。

だが、やってみないと始まらない。折角こうして同じクラスになったんだ。

何かを成し遂げるのも悪くない。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、俺たちは勝利の為の作戦に耳を傾けた。

### 第三話（後書き）

クリオネデース。

光「なんでカタコトなんだ？」

次の話はオリキヤラ紹介二したイトオモイマス。

光「そうなのか、だがなぜカタコト」

ではまたライシュウ。

## オリキャラにつ設定（前書き）

こんかいはオリキャラせうていにしたいとオモイマス  
二体めのオリキャラです（／＼（。｜。＼）

## オリキャラにつ設定

黒月 皆人【くろつき みなと】

性別 男

容姿 髪は藍色で髪は秀吉の少し長いばん。髪型はFFのレオン瞳の色は黒色。

顔は上の中ぐらい。

性格 エロと友達のためなら命でも捨てるという性格。

趣味 康太の手伝い、機械いじり

特技 カップ測定、盗聴器及び盗撮用カメラを5秒で見つける

一人称 俺 三人称 黒月、皆人 二つ名 『ムツツリの右

腕』

得意科目 数学、保健体育

苦手科目 古典、科学

総合科目 4500〜5000点（主に保健体育と数学）

家族 両親は13の時に事故死、そして今は一人暮らし

友達 康太とは幼馴染兼相棒。ライトとも仲が良い。



召喚獣 本人デフォルメ

武器 グレートソード

装備 赤い甲冑

腕輪 リバー反転

効果 こちらへのダメージを相手に与える。

消費点数 300点

## オリキャラにつ設定（後書き）

クリオネデーす

光「お、カタコトじゃなくなっ たな」

当たり前だよ。ハッハッハ！

光「いら付いた！死ね！」

ガキン！！（作者の武器と光の武器が交える音）

光「なに！？なぜこんなに強い？」

それはな、作者だからだよ！

光「くっ！このままでは．．．そうだ！」

どうした？俺に勝てる方法でも見つかったか？

光「では、また今度会いましょう」

それはセコい！

ダダダ！！（光が思いつきり走る音）

では、また今度（〇．．〇）／

## 第四話（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

「(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に

存在する  $X$  の値を一つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか？  
〃？の中

から選びなさい。

〃  $\sin A + \cos B$     〃  $\sin A - \cos B$     〃  $\sin A \cos B + \cos A \sin B$   
〃  $\cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

「(1)  $X = \pi/6$   
(2) 〃

教師のコメント

そうですね。角度「 $\pi/6$ 」ではなく「 $\pi/6$ 」で書いてありますし、完璧です

土屋康太の答え

「(1)  $X = \pi/3$ 」

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

「(2) およそ？」

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

風峰光の答え

「(1) X」 / 6

(2) 確か？だったかな」

教師のコメント

一応あってますが、いらない言葉を入れないように

## 第四話

「ああ、暇だ」

俺はテストも全て終わって寝転がっている。

「はあ、お前があんなに早くテストを終わらせるからだぞ」

「仕方ねえだろ、あのテスト簡単すぎたし」

俺はそう言っ、鞆から音楽プレイヤーを取り出しイヤホン  
を刺した。

「俺は少しの間音楽聴きながら寝とくから鉄人が来たら教え  
てくれ」

「わかった」

俺は雄二に伝えるとそのまま寝た。

「風峰・・・起きろ・・・」

「うーん・・・」

「おい、風峰起きろ」

「ん、あれ？西村先生雄二は？」

俺は雄二に起こせといったはずなんだが・・・

「坂本なら試召戦争に行ったぞ」

「そうですか・・・」

「言うことは分かっているな？」

「はい」

「じゃあ、ついてこい」

俺は鉄人の後を追った。

く補修室く

「くくくおおくくくく!!!」くくくくく」

モ「天使が、補修室に天使が舞い降りた！」

「何言ってるんだ？」

とにかく俺は全員を見て回った。

「ふう、疲れた・・・」

「すまん。手伝ってもらって」

「いや、いいですよ」

「そうか？」

そういつて鉄人が去っていった。

「さーて、帰るか」

俺は靴にはきかえて校門を出た。

「あ！教科書、卓袱台の下に置いたままだった！」

「．．．あほ。さっさと取ってこい」

「うう．．．。んじゃ、先に帰っていいよ」

「もちろんだ。待つてるわけがないだろう」

「わかっていたけど、薄情もの」

明久は学校に向かった。

「さて、帰るか」

「待て雄二」

「っ！（ビクッ）」

「俺から逃げれると思っていたのか？」

「すいませんでした！ー！」

そういつて土下座する雄二。

「はあ、仕方がない今回は許すが次は殺る」

「わかった。で、次はBクラスを攻めるからな」

「分かっている。設備を交換しなかったってことはBクラスのエアコンを破壊してくれとでもいったんだろ？」

「ふっ、さすがだな、何でもお見透視ってことか」

「まあな。だが、次は絶対出させてもらうからな」

「当たり前だ。お前が出なかつたら負けるかもしれないからな」

「そうか。ん、俺はこっちだから。また明日な」

「ああ、また学校でな」

そういつて俺たちは別れた。

ガチャッ！

「ふう、疲れた」

「あら、やっと帰ってきたのね」

「ん？なんでいるんだ？優子」



「そつ、それはおつ、幼馴染にあいにきただけよ！／／」

「そうなのか？でもなんか顔が赤いぞ。熱でもあるんじゃないか？」

「だつ、大丈夫よ！／／／」

「そうか？ならいいんだが」

なんか優子の顔がまた赤くなつたが気のせいかな？

「で、なんか食べたいものあるか？」

「えつ、うーん．．今は別にいらないわ」

「そうか。で、なんか話があるんだろ？」

「え、う、うん」

「話つてのはなんだ？」

「えーつと．．秀吉がAクラスに向けて試召戦争をするつて言つてたから、

少し賭けしない？」

「ほう、お前はあまり賭けが好きじゃないのにな」

「そうだけど、でも絶対に勝てるって自信があるからやるわけだし．．」

「まあな。で、賭けの内容は？」

「負けたほうが何でもゆうことを聞くってのはどう？」

「わかった。それじゃ、遠慮なく勝たせてもらうからな」

「勝つのは私よ」

そういつて優子は家から出ていった。

クラス単位ではFクラスには不利すぎるな。雄二なら一騎打ちでも

言っだろう、こっちは俺、雄二、姫路、康太、明久を出すと  
して、

相手は優子、霧島、久保、皆人、愛子が出るだろうな。

まあ、俺は優子と、雄二は霧島、姫路は久保、康太は皆人で  
明久には工藤

として、後は対戦科目だな。

Aクラス戦に向けてブツブツ言う俺だった。優子があんなこ  
と言っんだから

何かあるだろう。と、考えているうちに十二時になっていた。

「ん、もうこんな時間か。さーて、寝るか」

そう言って俺は眠りについた。

#### 第四話（後書き）

作者ですゝ

光「なんか今回短かったな」

そうなんです。その代わり次回は少し長くしよつと思いまーす  
光「そうなのか。まあ、がんばれ」

へいへい、ではまた会いましょう。

## 第五話（前書き）

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。  
『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント  
よくできました。

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント  
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント  
先生もRPGは好きです。

風峰光の答え

「高速」

教師のコメント  
確かにそうですが・・・

## 第五話

翌朝、いつも通り学校に向かう。今日は試召戦争で消費した点数を補給する為に

テスト漬けのはずだ。

「おはよー」

「グッモー」

教室の戸をガラガラと開ける。相変わらずの畳と卓袱台。Dクラスの設備も少しもったいなかったんじゃないかと思ったり。

「おう明久、ライト。時間ギリギリだな」

「ん、おはよう雄二」

「おっはー」

既に到着していた雄二が隣の卓袱台で胡座をかいている。持っているのは

英語の教科書。一応テスト前の悪あがきをしているようだ。

「おい雄二、ほかの奴らには何も言われなかったのか？」

「ん？何がだ？」

「Dクラスの設備のこと」

だ。  
折角勝ち取ったのを占領しないなど、普通は不満に思っは

「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない」

「ふーん」

皆が素直に言うことを聞いたのは昨日の雄二の働きを評価してのことだろう。

もっと上を狙えるかもしれないとわかった以上、Dクラス程度の設備には興味がないといったところか。

「それよりお前はいいのか」

「何が？」

「昨日の後始末だ」

ん？明久なんかしたのだろうか？

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされるとわかっていながら行動するなんて

ありえないよ」

生爪！？こいつ何しでかしたんだ！？

「いや、俺の始末じゃなくて」

「一体何が言いたい」

「吉井っ！」

「ぐぶあっ！」

明久の台詞が突然の拳で遮られる。

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよっ！」

随分といきりたっている様子の島田。

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消化器のいたずらと窓を

割った件の犯人に仕立てあげたわね……！」

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングがあがつちゃったじゃない！」

まだ上がる余地があったとは意外だ。

「と、本来は掴みかかっているんだけど」

島田が急に冷静さを取り戻す。

掴む前に殴っているから十分だと思っが……。

「アンタにはもう十分罰が与えられてるようだし、許してあ

げる」

「うん。さっきから鼻血がとまらないんだ」

「いや。そうじゃなくてね」

「ん、それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど」

島田が楽しそうに、本当に心から楽しそうに告げる。

「監督の先生、船越先生だつて」

聞いた瞬間、明久は扉を開けて廊下を疾駆していった。

「なあ、明久に何があつたんだ？」

「昨日の試召戦争でいろいろとね」

「ふーん」

そう言いながら俺たちはテストを受ける準備をしていた。

くく

「うあー・・・づがれだー」

明久が机に突つ伏す。



とりあえず四教科が終了。テストはやっぱ疲れるな。

「うむ。疲れたのう」

いつの間にか近くに来ていた秀吉が答える。今日は髪をポニテール  
にしている。その顔でポニテールなんてしたら女にしか見え  
ないぞ。

「・・・(コクコク)」

いつも無口で存在が薄く思われがちな康太もいる。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯  
とカレーに  
すっかな」

おいおい、人間が食う量じゃないだろ！

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうね」

「・・・(コクコク)」

康太がうなずいているのは下心のせいだろう。島田に色気を  
求めても無駄  
だというのに。

「ねえ、吉井、風峰、なんかウチの悪口考えてない？」

「滅相もございません」

「そんなことはないぞ」

こいつは相手の心を読めるのか！？

「じゃ、僕は贅沢にソルトウォーターあたりを」

「お前は塩水をも贅沢とぬかすか」

「あ、あの。皆さん・・・」

立ち上がり、食堂に行こうとしたところで声をかけられた。

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと・・・お、お昼なんですけど、その、  
昨日の約束の・・・」

姫路がもじもじしながら俺達の方をみている。どうしたんだ。

「おお、もしかや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と、身体の後ろに隠していたバッグを出してくる。そういえば、  
そんな約束

もしてたっけ？

「迷惑なもんか！ね、雄二、ライト！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かったー」

ほにゃつと嬉しそうに笑う姫路。不思議だ。ご馳走してやる側なのに喜ぶとは

。俺には優しい女の気持ちなんてよくわからねえ。

「むー．．．っ。瑞希って、意外と積極的なね．．．」

明久を親の仇のように睨んでいる島田。厳しい女の気持ちもよくわからねえ。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上でも

行くかのう」

「そうだな」

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ」

「ん？雄二はどこ行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張った礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

おっ、珍しく気遣いを見せる島田。一体どういつ風の吹き回しだ？

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

「きちんと俺たちの分をとっておけよ」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる」

雄二と島田は財布を持って教室に出ていった。一階の売店にでも行つたの  
だろう。

「僕らも行こうか」

「そうですね」

明久が姫路の持っていたバッグをもって屋上まで歩いていった。

「ん、秀吉？どうしたんだ？早く行くぞ」

「の、のう」

「ん？なんだ？」

何故か秀吉の顔が赤い。風邪か？

「て、手を繋いでもいいかの？」

「どうした？急に」

「な、なんでもないのじゃ。／＼／」

「ん？まあ、手ぐらいなら繋いでやるけど」

「ほ、ホントか！」

「ああ、ホントだが・・・」

「さあ行くのじゃ」

俺は秀吉と手を繋ぎながら屋上まで歩いていった。

くく

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうですねー」

「で、秀吉。もう」

「な、何を言うのじゃ！明久！」

「えっ！？もう、言ったのかと思ったよ」

「そ、それは、Aクラスとの後にするつもりじゃ」

「そうなんだ」

「おい、なんの話だ？俺も混ぜろ」

「だめだよ（じゃ）！」「」

「なんだよ！教えてくれたっていいじゃんか」

「あとのお楽しみじゃ」

「まあ、いいけど」

と、いいあいをしているうちにもう弁当の支度はできたようだ。

「」「」「おおっ！」「」「」

俺たちは一斉に歓声をあげた。すごくうまそうだ。唐揚げやエビフライに

おにぎりやアスパラ巻など、定番のメニューが重箱の中に詰まっている。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」

「……（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムツリーニっ」

動きの素早い康太が明久のエビフライをつまみとった。そして、流れるように

口に運び

「・・・（パクッ）」

ボタン　ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震え出した。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

秀吉、明久と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路が慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「・・・（ムクリ）」

康太が起き上がった。

「・・・（グッ）」

そして、姫路に親指を立てる。

多分、『凄く美味いぞ』と伝えたいんだろう。

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

ムツツリーニが言いたいことが分かったのか、姫路が喜ぶ。

だが、康太

それならなぜ足が未だにガクガクと震えてるんだ？俺にはK  
O寸前のボクサー

にしか見えねえよ。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路が笑顔で勧めてくる。俺はその笑顔がまるで悪魔のようにしか見えない。

（・・・秀吉、ライト。あれ、どう思う？）

（・・・どう考えても演技には見えん）

（・・・もし、演技だとしても俺たちにはなんのメリットもない）

（だよね。正直やばいよね）

（明久。お主、体は頑丈か？）

（正直胃袋には自信ないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから）



（なら、俺がっこう！）

（だ、ダメじゃ！危険すぎるのじゃ！）

（仕方がないだろう。あとのことは任せるぞ）

そう言って俺は箸を持った。

（いざ参る！）

パクっ！

「お、案外うま　　ゴバァっ！」

「ライト！」

俺はそのまま意識がきえさった。

## 第五話（後書き）

ドウモー作者クリオネです！

光「おいっ！なぜオリキャラ紹介したのにそのオリキャラを出さん！」

ばかだな。AクラスのオリキャラだからAクラス戦につかうに

きまつてんだろ！

光「そうか。ならいいんだが・・・」

ではまた会いましょう！

光「バイバイ！」

## 第六話（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

「 $C_6H_6$ 」

教師のコメント  
簡単でしたかね。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン＝ベンゼン」

教師のコメント  
君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

「 $B-E-N-Z-E-N$ 」

教師のコメント  
後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

風峰光の答え

「 $C \times 6 + H \times 6$ 」

教師のコメント  
君はもつとまともな回答は出来ないんですか!?

風峰光のコメント  
「無理デース」

## 第六話

こ．．．ここは？俺が気づいた時、空ではなく白い天井があった。

「ここは．．．保健室か」

そうか、あの後俺は何時間が目覚めなかったからここに放置  
ってことか。

「早く教室にいかねえと」

俺はそう言いながら教室に向かっていった。

「じゃ、行こうか。人数少なくて不安だけど」

中から明久の声が聞こえた。

「おい、俺を放置したやつの名だけを言え」

「な！ライト！？オマエ生きてたのか！？」

「当たり前だ！あんなので死ねるかよ！」

入った瞬間、雄二が俺死人扱いしてきた。

「で、どこに行くんだ？見た感じ戦争は終わってるようだが．

」

「ああ、今からCクラスに行く」

「なぜだ？」

「Cクラスが俺たちに戦争を仕掛けようとしてんだ」

「そういうことか。なら、俺もついていく」

「お前だとそういうと思ったが、まあ人数が少ないからな贅  
沢は言ってられ  
ねえな」

「どうでもいいけど早くいこうぜ」

「そうだな」

俺、雄二、明久、姫路、康太というメンバーでCクラスに向  
かう。

「吉井。アンタの返り血こびりついて洗うの大変だったんだ  
けど。  
どうしてくれるのよ」

「それって吉井が悪いのか？」

廊下に出たところで、ハンカチで手を拭いている島田と鞆を  
肩に担いでいる須川  
に会った。

「あ、島田さんに須川君。ちょうど良かった。Cクラスまで

付き合つてよ」

「んー、別にいいけど？」

「ああ。俺も大丈夫だ」

盾、とでも思ってるんだろうな。明久は。

「急がんとCクラスの代表が帰ってしまうぞい」

「だな。急ごつ」

こうして更に島田と須川を加えた七人でCクラスへと向かうことになった。

「Fクラスの代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄二がそこにいる全員に告げる。

Cクラスの教室にはまだかなりの人数が残っていた。

「私だけど、何かようかしら？」

俺らの前に出てきたのはまじりつけの無い黒髪をベリーショートにした気が

が強そうな女子。確か名前は小山だからヒステリー小山でいいや。

「なんかその子が私の悪口を言ってるような・・・」

「そんなことはねえよ」

あぶねー！なんだあいつは！相手の心が読めるのか！？

「そんなことはおいといて、Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間は

あるか？」

「クラス間交渉？ふうん・・・」

いやらしい笑みを浮かべているヒステリー小山。

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ・・・。どうしようかしらね、根本クン？」

ひすて・・・だるいのでヒス小山が教室の奥にいる人たちに声をかけた。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？根本君！どうしてBクラスの君がこんなところに！」

いかにもクズ顔している根本が出てきた。今、俺たちの敵の代表である。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に

関する行為を一切禁止したよな？」



「何を言っ  
て」

「先に協定を破ったのはそっちだからな？これはお互い様、  
だよな！」

クズが告げると同時に取り巻きが動き出す。そして先程まで  
戦場にいた、

小柄な数学の長谷川先生の姿が隠されていた。

「どうせ攻撃してくるんだ、なら先手必勝！Fクラス風峰が  
Bクラス全員に

数学勝負を仕掛ける！」

モ「なにっ！？俺たち全員にだと！？ふざけやがって！」

モ「返り討ちにしてやるよ！」

「雄二ここは俺が引き受けるから逃げる！」

「試<sup>サモン</sup>獣召喚！！」

『Fクラス風峰光 数学 542点』

VS

Bクラスモブ全員 数学 合計785点』

モ「何！？500点オーバーだと！？」

モ「だが数ではこっちが有利だ！」

モ「7人差で勝てるかな！」

「戦争中は戦えなかったからな存分に暴れるぞ！」

俺は腕輪を使った。俺の腕輪は早くなるけど操作が難しくなる。

バンっ！俺は一番前にいたやつの召喚獣の頭を撃った。

モ「な！？もうやられたぞ！？」

バンバンっ！！敵がちょうど二列に並んでいたので先頭の頭を撃った。

モ「俺もだ！」

モ「私もよ！」

モ「俺のやつもだ！」

『Fクラス風峰光 数学 512点』

VS

Bクラスモブ全員 数学 DEAD』

「なんだ、こんなに弱いのか。がっかり」

俺はそう言って教室に帰っていった

（（

「あー、疲れたー」

「ら、ライト！無事だったのじゃな！」

「おう！全員片付けてきたぞ！」

戸を開けると秀吉が駆け寄ってきた。

「お。戻ったか。お疲れさん」

「無事だったようだね」

「ん。ただいま」

雄二と明久もやってくる。康太もこっちを見て小さく頷いた。

「さて、お前ら」

「ん？」

その場にいる全員を見回して雄二が告げる。

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形に

なるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

向こうもそれが狙いなのだから、俺らが勝ったとしたら間違  
いなく息つく

暇も与えずに攻めて来るだろう。

「それならどうしようか？このままじゃ勝ってもCクラスの

餌食だよ？」

「そうじゃな・・・」

「大丈夫だ。雄二がなんの作戦もないまま突っ込むほど馬鹿じゃない」

「そういうことだ」

お前ら・・・何のために秀吉をクラスにおいていったと思ってるんだ？

まあ、これぐらいは自分で考えさせるか。

「向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」

「考え？」

「明久、目には目を歯には歯をって言葉聞いたことないか？」

「つまり、明日の朝にその考えってのを実行するって言うってんだよ」

「そういうことか」

「はあ・・・こいつは一体どこまで馬鹿なんだ？」

「ライト今に始まった事じゃないだろ」

「それもそうだな」

た。

この日はそれで解散となり、続きは翌日へと持ち越しになっ

## 第六話（後書き）

ドウモークリオネですゝ

光「同じくライトだ」

いやゝ戦争でられなかったね！

光「さすがに姫路の弁当があそこまで強いとは．．．」

ご愁傷さま．．．では次は、やっとな久に例のあの子が．．．

光「ネタバレしていいのか？」

大丈夫だよ。その時には、君の記憶も消えてるから

光「なにゝゝゝ！！！！」

では、また今度ゝゝ

光「またなー」

## 第七話（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

「good - better - best      bad - worse  
- worst」

教師のコメント  
そのとおりです。

吉井明久の答え

「good - gooder - goodest」

教師のコメント  
まともな間違え方で先生驚いています。goodやbadの比較級  
と最上級は語尾に - er や - est をつけるだけじゃダメです。  
覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「bad - butter - bust」

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

風峰光の答え

「good-friend-companion」

教師のコメント

『良い』『友達』『仲間』 不正解ですが君の解答は好きです。



## 第七話

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校した俺らに雄二は開口一番そう告げた。

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

今の時刻は午前八時半。開戦予定時刻は九時だ。

「明久、少しは考えろ。BじゃなくてCの方だ」

「ライトの言うとうりだ、そして秀吉にはこれを着てもらっ

そう言っ雄二が鞆から取り出したのはウチの学校的女子制

服。

．．雄二それをどうやって手に入れたんだ？

「い、いやじゃ！ライトのおる前では女装などせん！」

「分かった、なら！」

「何がグフツツ！！（バタツ）」

突然、雄二に腹を殴られ俺は気絶した。

くく

「う、う．．．」

「お、やっと気がついたか」

目の前にはクソ（ユウジ）がいた。

「おい、今クソと書いて俺って読んだろ！」

「あん、クソにクソって言って何が悪いんだ！ああ！」

「まあ、それはおいといて」

「おいとくな！」

「黙れ！お前のせいで俺は秀吉に折檻されてたんだぞ！」

折檻！？秀吉が？ありえねー！

「で、今からBクラスまで行くからついてこい」

「りょーかい」

俺はそう言っただけで雄二について行った。

くく

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集まりやがって。暑がるしいことこの上ないっての」

Bクラスの代表、<sup>クラス</sup>根本の声が聞こえる。

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

対する雄二。姫路が参加してない所を見ると本体を動かざるおえない

状態なのだろう。

『らあっ！』

明久の声だ。壁から大きい音がするってことは壁でも壊すのか？

さすがはキング・オブ・バカなだけはあるな。壁を壊しての奇襲、

明久にダメージはあるがこれ以上ないってぐらいいい作戦だ。

「はあ？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？お前らの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「・・・お前らには役不足だからな。ライト行ってこい！」

「わかった！」

「けっ！数学が少しできるからって調子に乗るなよ！」

モ「俺たちが相手だ！」

モ「行くぞ！」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚！！」

『Fクラス 風峰光 現代国語 438点』

VS

Bクラス モブ二人 現代国語 合計 253点』

モ「何っ！400点オーバーだっ！？」

モ「姫路以上の実力じゃねえか！？」

「弱い！」

俺は召喚獣でモブ二体の召喚獣の頭を打ち抜く。

『Fクラス 風峰光 現代国語 438点』

VS

Bクラス モブ二人 現代国語 DEAD』

「どうだ？これで俺たちに心配する必要はなくなったよな」

「けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組？それがFクラスのことなら、  
もうすぐお前が負け組代表だな」

『はああっ！』

明久の攻撃は今ので四回目。フィードバックあるんだからやりすぎない

ことを願う。

「．．．さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないか？」

「けっ。言ってる。どうせもう決着だ。お前ら一気に押し出せ！」

「態勢を立て直す！ライト作戦どつりにやってくれ！皆、一旦下がるぞ！」

「どうした、さんざんふかしておきながら逃げるのか！」

「いいや！俺だけで十分だって意味だよ！」

「けっ！ぬかせ！」

「だああーっしやあーっ！！！！！！」

来た！よし俺は作戦道理に！

「Fクラス風峰Bクラスの全員に現代国語勝負を仕掛ける！！！」

モ「正気か!？」

モ「俺たち全員に勝負だと!？」

モ「返り討ちにしてやるぜ!」

「あとは頼んだぞ! 明久!」

「わかってるよ!」

『Fクラス 風峰光 現代国語 438点

VS

Bクラス モブ全員（近衛部隊以外） 現代国語 153

2点』

「ちっ! 近衛部隊を逃した!」

モ「殺れー!」

モ「おおっ!」

「なら俺はこつちをかたずけるか!」

俺は召喚獣の銃口をモブたちの召喚獣がいる方向に向ける。

「いっけー!」

俺はマシンガンの如く乱射した。

「オラオラオラ!」

モ「そんなに適当に撃ってたら当たらねえよ！」

俺の召喚獣が斬られるがかるうじて生き残った。

『Fクラス 風峰光 現代国語 30点』

V S

Bクラス モブ三人 現代国語 125点』

モ「へへへ！俺たちの勝ちだな！」

モ「補修室送りだー！ー！ー！！！」

「いや、お前らの負けだ」

モ「はっ？何言ってるの？」

モ「この状態から勝てるんでも？」

「お前らの代表をってみろ」

モブは不意に根本<sup>クラス</sup>のほうを振り返る。

『Fクラス 土屋康太 保健体育 441点』

V S

Bクラス 根本恭二 保健体育 DEAD』

モ「な、なんだとー！！！！！」

ムツツリーニが一撃で倒したそうだ。

「戦争終了！勝者、Fクラス！」

Fモ全「ヤッターーーーー！！！！！！！！！！」

今ここに、Bクラス戦は集結した。

「明久よ、随分と思い切った行動にでたのう」

終戦後、Bクラスにやってきた秀吉が明久に言った。

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

「おい、明久。男なんだったらそんぐらいでめそめそするな

」

「だって痛いもん！」

「じゃが、お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことは何も考えずに自分の立場を追い詰める、  
すごく明久にお似合いの作戦だったぜ」

「……遠まわしにバカって言ってる？」

「そつだが？」



「うわーん！」

普通、学校の壁を破壊するなんて、まさしくバカにしか考えつかない

作戦だったな。

「ま、それが明久の強みだからな」

馬鹿が強みか、いいことを言うな。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……………」

床に座り込んでいる根本<sup>クス</sup>。さっきまでの強気が嘘のようだ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台を

プレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言にざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺たちの目標はAクラスだ。  
ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑め

ば開放して

やるつかと思う」

その言葉でうちのクラスの皆はどこか納得したような表情になった。

Dクラス戦でも言ったことだ、雄二の性格を理解し始めているのだろう。

「・・・条件はなんだ」

力なくクズが問う。

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前は散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障り

だったんだよな」

凄いいい様だが、そうやって言われるだけのことは奴はしている。

だからこそ周りの人間は誰もフォローしない。本人も分かっている

みたいだ。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

昨日の昼に言っていた、あの取引の材料を提案する。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言してこい。」

そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。

あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・それだけでいいのか？」

疑うようなクズの視線。馬鹿が、雄二がsonで許すとも思つてんのか？

「ああ。Bクラス代表がこれを着て言つたとうりに行動してくれば

見逃そう」

そう言つて雄二が取り出したのは、先ほど雄二が秀吉に着ろつて

いつてたやつだな。

「ば、馬鹿なこと言ふな！この俺がそんなふざけたことを・・・」

モ「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」

モ「任せて！必ずやらせるから！」

モ「それだけで教室を守るのなら、やらない手はないな！」

Bクラスの仲間たちの温かい声援。これを見るだけでクズが今まで

どういった行動を取ってきたのかがわかる気がする。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふう！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとな」

一瞬で代表を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。  
流石の雄二も変り身の早さに驚いている。

「では、着付けに移るとしようか。明久、任せたぞ」

「了解」

俺は何故かこの後に嫌な予感しかなかったので家に帰ることにした。

帰る途中――

次はAクラス戦かやっところまで来たって感じだな。家帰って勉強でも

しとかねえと優子に負けちまうかもしれないからな。優子、勝つのは俺だ！！

## 第七話（後書き）

どうも～作者です～

光「ライトだ」

何か最後カッコつけてたね！

光「だまれ！貴様のしたことだぞ！」

とゆうことで、今回はゲストをお呼びしました！

光「豪快に無視すんな！」

皆「よお、久しぶりだな。ライト」

光「おおっ！皆人か！」

まだ出していないのでかわいそうだと思って出しました。

光「よかったな、皆人」

皆「本当に良かった！この作者は優しいぜ」

ああ．．ちよつと言いくいんだが．．

光「うん、どうした？」

もう終わりなんだわ。

皆「なに～～！！！」

と言つことでさよなら～

光「ここは流れに合わせて、また次回会いましょう」

皆「．．．．．（ぐすっ）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5869x/>

---

バカと最強の男の娘と召喚獣

2011年11月1日20時11分発行